

校訓 明朗 自主 創造  
教育目標

【知】  
賢く

【徳】  
優しく

【体】  
逞しく

評価項目		R7 目標	比較	年度末評価						
				(A+B) %	A	B	C	D		
知	学校	将来の夢や目標を持っている生徒の割合	75%	↗	90%	63	27	8	2	
		「授業の内容が分かる」と応えた生徒の割合	70%	↗	89%	国 97	58	39	3	0
						数 85	44	41	13	2
						社 90	52	38	9	1
						理 89	47	42	10	1
	英 82	42	40	14	4					
	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげている生徒の割合	60%	↗	90%	44	46	9	1		
	話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりしている生徒の割合	A50%	↗	A割合 66%	66	29	4	0		
話し合い活動や発表の場面では、自分の考えをわかりやすく伝えようとしている生徒の割合	A50%	↗	A割合 71%	71	27	2	0			
地域と協働	自分の住む地域には良いところがあると思っている生徒の割合	90%	↗	98%	79	19	2	0		
	学校や地域が行う体験活動に参加し、達成したよさびややりがいなどを感じている生徒の割合	90%	↗	99%	76	24	1	0		
<p>* 「授業の内容が分かる」生徒の割合は、目標の70%を全ての教科において超えており、特に数学と英語のAの割合が上半期に比べ10%程度高くなっている。しかし、個別の状況を見ると依然と「分からない」と訴えている生徒も一定数おり、<b>単元ゴールに向けてメタ認知を踏まえて自らの学びをデザインしていく能力</b>を高めていく手立てを構築していきたい。</p> <p>* 「学習した内容について、わかった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげている」生徒の割合について、10月実施の県学調質問紙調査の85%から5%向上している。今年度の学校経営上の最重要課題に「学習習慣の確立」を掲げており、各教科担任が授業と家庭学習のリンクを模索しながら、「何を・どのように・どれくらい」すればいいのか学び方を丁寧に指導・評価しつつ、非認知能力の重要性も鑑みながら<b>学びに向かう力の改善に努めてきた成果</b>が現れている。次年度も、<b>家庭での生活リズム（リ九高ルール）との関連も踏まえつつ、学校教育目標に掲げる「自主的な学び」を定着させるため、家庭との一層の連携強化</b>を図りながら取り組んでいきたい。</p> <p>* 地域の人的・物的資源を活用した教育課程内外の体験活動を推進したり、ボランティア活動による地域貢献活動を重ねてきたことにより、「学校や地域が行う体験活動では、達成した喜びややりがいなどを感じることができた」や「自分の住む地域には良いところがある」と答える生徒の割合が年間を通して非常に高い状態を維持できた。次年度に向け、<b>地域ニーズを踏まえた復興教育計画のリニューアルを進めるとともに、生徒会企画による取組を推進しながら更に地域との協働活動を継続・発展させていく。</b></p>										
徳	学校	「学校に行くのは楽しい」と思っている生徒の割合	90%	↗	95%	71	24	4	2	
		自己肯定感をもっている生徒（自分には良いところがあると思っている生徒）の割合	80%	↗	92%	51	41	6	2	
		人が困っているときは、進んで助けようと思う生徒の割合	95%	↗	99%	80	19	1	0	
		いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う生徒の割合	100%	↘	99%	93	6	1	0	
		多様な意見を認め合うことに価値を感じている（自分と違う意見について考えるのは楽しいと思っている）生徒の割合	80%	↗	91%	59	32	8	1	
<p>* 本校教職員があらゆる場面で生徒個々の良い点を認めつつ個々の可能性を引き出そうと対応しており、<b>上半期評価と比較しても生徒自身の自己肯定感のA（積極肯定）割合が約10%高まっている</b>。学校生活のあらゆる機会を捉えて、生徒指導の三機能（自己存在感・共感的理解・自己決定）を活かした自己指導能力の育成に努めてきた成果である。また、「<b>自分には良いところがあると思う</b>」生徒の割合が<b>90%を超えた</b>ことも大きい成果である。</p> <p>* 諸活動の中で他者との関わり方を身に付け、人権を尊重することができる状況であり、いじめ問題も多くなかった。特に<b>道德教育が各学年においてしっかり実践されていることと、生徒会が主体となっていじめ問題や「リ九高ルール」等について考える取組実践が、いじめを生まない学校風土を創るうえで効果が大きかった</b>と言える。また、<b>いじめ問題の未然防止や早期発見の年間計画に基づいた取組と、全教職員による教育相談体制の強化も有効だった。</b></p>										
体	学校	体力・運動能力調査の総合評価（5段階評価A～E）で、A・B・C段階の生徒の割合	80%	↗	83%	男子 81.3% 女子 85.1%				
		肥満傾向生徒の割合（1月身体測定結果）	10%以内	↘	15%	男子 17.1% 女子 12.8%				
		先生や周りの人は、自分の良いところ認めてくれていると思う生徒の割合	90%	↗	96%	61	35	3	1	
	家庭と協働	う歯のない生徒及びう歯治療完了生徒の割合（冬休み終了時点）	80%	↗	86%	う歯なし 97名 処置完了 34名 治療未完了21名				
		スマートフォンやインターネットを使うときは、危険に巻き込まれる可能性等があることを理解している生徒の割合	100%	↗	100%	96	4	0	0	
<p>* 「体力・運動能力の向上」については、継続的な「60運動」の取組により一定の成果があった。数値目標と比べると、2年生男女と3年生男子が85%を超えている。逆に<b>1年生男子が71%と低く、小学校時代における運動経験の未熟さが原因</b>と思われる。肥満傾向も<b>1年生男子と3年生女子が課題</b>である。肥満予防対策の一つとして、昨年度からのスポーツ医・科学サポート事業によるトレーニングや食育を含めた講習会を実施しているが、明らかに生徒及び教職の意識が高まっており、今後も継続していきたい。</p> <p>* <b>齲歯の治療率は、冬休み中における治療が進み目標の80%を大幅にクリア</b>しており良好な結果となった。また、<b>齲歯なしの割合が63%</b>と非常に多く、学校はもとより<b>家庭での幼少期からの取組の成果</b>が大きい。しかし、<b>歯科健診での有所見者が3割と多くな</b>っており、学年が上がるほどその割合が高い。</p> <p>* 教育相談については、発達支持的生徒指導を充実させるための教育相談体制を全教職員の共通理解のもと構築できた。保護者との連携も密に行われ、専門機関を含め組織的に推進することができた。</p> <p>* スマホの使用については、生徒たちは情報モラルに対する知識は持っているものの、日常的に長時間にわたる使用で生活リズムを崩したり、友人とのSNS等のやりとりが原因で人間関係に問題が生じるケースが依然と見られる。1月末の県学調質問紙調査から、全校生徒の61%が1日当たり2時間以上携帯電話やスマートフォンを使用していることが判明した。3時間以上の使用者も20%いる。<b>家庭ルールの徹底を粘り強く家庭への協力を求めていくことと、スマホ・インターネットが絡む生徒指導上の問題が発生した場合は、直ちに警察に対応を依頼しながら毅然と問題解決に向けて進めていくことを、繰り返し生徒に周知していく。</b></p>										

